初恋～ホワイトクリスマスの聖なる夜～

椎名亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
初恋〜ホワイトクリスマスの聖なる夜〜

【Ｎコード】
Ｎ１２９８Ｐ

【作者名】
椎名亮

【あらすじ】
小学４年生の淡い初恋の物語

オレは告白ってものをしたことがない。ゲイの世界っていうのはやっぱり幾分か閉鎖的なところがあって、なかなかオープンに自分の気持ちを相手に伝えることが難しいのだ。

そう言えば、たった一回だけ告白に近いことならしたことがある。自分がゲイだって気付く前の、淡い初恋の思い出…

？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？

オレは当時小学４年生だった。同じ小学校に、オレが大好きだったＡって奴がいた。なんでＡのことが好きかって聞かれても答えに詰まるのだが、とにかくＡのことが気になるのだ。Ａは勉強は出来る方ではなかったが、スポーツ万能で、なによりとても優しかった。口ではかっこつけたことを言う癖に、本当はとても繊細だってことをオレは知っていた。

その年のクリスマス・イブは雪が降った。同じそろばん教室に通っていたオレ達は、その日も終わると一緒に帰った。空を見上げるとふんわり柔らかい雪が、街頭にキラキラと照らされながら舞っていた。

「ホワイトクリスマスだね」

Ａは何の気なしにそう言った。なんてロマンティックなんだろう。クリスマス・イブの聖なる夜に、Ａと二人っきりでこうして空を見上げているなんて。体は震えるくらい寒かったのに、心はほくほくと温かかった。この瞬間を終わらせたくない。Ａと一緒にいたい。

もっと二人だけでいたい。オレは意を決して言った。

「ちょっと話したいことがあるから、一緒に公園行こう」

公園には寒かったからか誰もいなかった。気持ちを伝えるにはこの上ない絶好のシチュエーションだった。

「どうしたの？」

「いや…別に大したことじゃないんだけどさ。」

オレはどうしても口に出すことが出来なかった。オレの気持ちを知ったAの反応が恐かったからだ。第一、気持ちを伝えたところでどうもなりはしないことくらい、当時のオレにもよくわかっていた。

「でも、なんか言いたいことがあるんでしょ？」

「うん。あのさ…」

オレはどうしていいか分からなくて、取り敢えず差していた傘をそのまま宙に放った。なんでこんなことをしたのかは未だによく分からないが、Aには事の重大さが伝わったようだった。

「オレさ…なんていうか、Aと一緒にいて今まですごく楽しかった。これからも親友のままでいてほしいんだけど」

「わかったよ。それだけ？」

それだけではもちろんなかった。オレはAを抱き締めたかった。クリスマスの夜に、Aを自分の腕の中に感じたかったのだ。まだ子供だったオレには、そうすることでしかAと『一つになる』ことが出来なかったのだ。それでも、どうしても切り出せなかった。

「ホントはもっと大事なこと伝えたいんだけど、何て言ったらいいのかわかんないや。」
「そうなの？どんなこと？言ってみてよ。」
「自分でも分かんない。でもすごく大事なこと。」
「うーん…。それじゃ分かんないよ。」
「とにかくさ、Aはオレにとって特別なんだ。でも、オレが言いたいのは、もっと大事なこと。」
「ふーん。」
長い沈黙がオレ達を包んだ。こんなところまでAを連れてきて、何も出来ない自分が不甲斐なかった。それでも、Aは感づいてくれたかもしれない。最後の望みに全てを託した。
「わかったでしょ？オレがいいたいこと。」
「うん。なんとなく分かった！」
「ホント？何だと思った？」
「え？だからさ、男同士が結婚してもいいかも、ってことでしょ？」
完全に意表をつかれてしまった。まさかAがここまで話を勝手に発展させているとは知らなかったからだ。でも、好きだって気持ちは伝わったみたいだ。少し気持ちが軽くなるのを感じた。
「うーん…もっと大事なことだよ。でもそんな感じ。」
オレはそうとだけ付け加えた。オレの中で、今Aを抱きしめたいという衝動は、結婚なんかよりずっと高尚で神聖だと思ったからだ。

？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？

こうして、オレの初恋は幕を閉じた。別々の中学に進学したオレ達は、徐々に会話がかみ合わなくなり、いつの頃からか通りすがっても知らん顔をするようになった。高校でぐれてしまったAは、今はパチンコで生計を立てていると聞く。周りはAが落ちぶれたと言っているが、オレはそうは思わない。繊細で感受性の強いAのことだ。一度躓いても、きっと自力で答えを見出すに違いない。オレはそう信じている。

（後書き）

貴重なお時間を割いていただいて、感謝しています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1298p/

初恋〜ホワイトクリスマスの聖なる夜〜

2010年11月25日14時03分発行